

主体的・実践的な力を育てる特別活動の指導の工夫

—子ども一人一人が活躍できる係活動の指導の工夫—

上牧町立上牧小学校 教諭 高橋 麻衣子

Takahashi Maiko

要 旨

学級活動における学級や学校の生活の充実と向上を図るため、子どもたちの自発的・自治的な活動を目指して係活動の活性化に取り組んだ。キャリア教育の視点で係活動を見直すことで、子どもたちへの適切な指導の工夫や評価の在り方を探った。

キーワード：学級活動、係活動、キャリア教育、

1 はじめに

4月の学級開きで、子どもたちに対して、最高学年としてこの1年間をどのように過ごしていくかについて話す中で、「どの子もこのクラスでよかったと思えるクラスにしたい」ということを伝えた。子どもたちからは、「最高学年としての役割や責任をしっかりと果たしていきたい」「最後の年を思い出深い一年にしたい」「仲のよい楽しいクラスにしたい」という声が聞かれた。

また、決められたことや当番の活動には、まじめに取り組もうとする態度が見られる一方で、自分たちからすすんで活動したり、みんなの前で積極的に意見を言ったりすることが苦手な子どもが多いように感じられた。特に、学級活動の時間では、友達の前で自分の考えを話しにくい子どもが多いというのが実態であった。

特別活動では、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸張を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」ことが目標として定められている。望ましい集団活動を通じた活動において、子どもたちが自ら問題を発見し、解決する問題解決力や、なかまとのかかわりの中から人間関係を築く力を育てることは重要である。

特に学級活動では、子どもたち一人一人が学級の一員としての役割を受けもち、学校生活の充実と向上を目指して活動するとともに、集団の中で自己を生かし、日常生活を営むために必要な行動の仕方を身に付け、健全な生活態度を育成することが目標として示されている。こうしたねらいが達成できるような体験を積み重ねることで、子どもたちは学級集団の一員としての所属感や、学級生活の充実と向上を目指した問題解決能力を身に付けることができるものとする。そして、学級の中で希望や目標をもち、自分を生かし、主体的に生活や学習に取り組む基本的な態度を体験を通して学ばせていきたい。中でも係活動は、子どもたちが主体的・創造的に活動しながら、よりよい学級生活を築く活動である。自主的な体験を重ね、周囲の友達に認められることで有用感、自己効力感を得、自らの学級への所属意識へとつながっていくことができるものとする。

近年、若者の勤労意欲・職業意識の低下が大きな社会問題としてとり上げられ、小学校においてもキャリア教育の推進が求められているところである。キャリア教育は、子どもの勤労観や職業観を育

てることをねらっている。特に、勤労観については、日常生活の中での役割の理解や考え方、役割を果たそうとする態度、役割を果たす意味やその内容を理解する力が求められている。こうした、集団の中での自己の役割を果たそうとする態度は、特別活動の「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図る」「集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度の育成」などの目標と重なる部分が多い。

そこで、子どもたちの問題解決能力の向上や自主的・主体的な態度を育てるために、特に学級活動における係活動をキャリア教育の視点から見直し、学級において子どもたち自身が個々の役割を果たそうとする態度を育てていきたいと考えた。また、子どもたち一人一人が学級生活を向上させるための役割を果たすことで、周りから認められ、学級集団における自己の有用感、自己効力感を体感することにつながるものとする。その結果、子どもの学級集団への所属意識が高まり、最終的には学級のめあてである「どの子もこのクラスでよかったといえるクラス」づくりを目指していきたい。

2 研究目的

キャリア教育の視点で係活動を見直し、児童に自主的・実践的な力を身に付けるための指導法について研究する。

3 研究方法

まず、「キャリア教育の視点で係活動を見直すことで、係活動が活性化され、子どもたち一人一人が学級での有用感・自己効力感を感じ、主体的・実践的な力を身に付けることができる」という仮説を立て、その検証を以下の方法で試みた。

キャリア教育では、自分や他人に関心をもつことや、働くことの意義を理解し、目標に向かって努力する態度を身に付けることなどが小学校でのねらいとされている。このねらいを達成するために、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意志決定能力の四つの能力が必要とされており、これら四つの能力と係活動の関係を考えた。

○人間関係形成能力・・・「人との関係を結べる力」 係活動においては、周りの友達とかかわりをもって活動することが必要不可欠となってくる。友達と交流をもつことを意識した場を設定することで、学級内での人間関係がよりスムーズになっていくと考える。

○情報活用能力・・・「情報を的確に把握し、必要に応じて選択できる能力」 情報を集め、必要な情報を選択し、活用する力を係活動で育てたい。

○将来設計能力・・・「将来の生き方を描く力、課題を解決する道筋を描く力、自分で問題を見付け解決していく力」 係活動では、自分達で意志決定して活動をすすめるため、様々な課題に直面することが予想される。そこで、子どもたちが問題に直面した時に、問題解決の道筋をもった活動ができるような支援の方法について探していきたい。

○意志決定能力・・・「問題解決し、自分の考えをもとに自己決定できる力」 日常の様子をみていると、子どもたちは自信の無さから周りの目を気にしたり、自らの考えを表すことに消極的である。自分の考えで決定し、活動できる手だてを考えていきたい。

このように、キャリア教育で必要とされる4つの能力の視点からこれまでの係活動を見直し、整理した結果、様々な課題が見えてきた。そこで、次の五つの視点で、課題を解決する取組を進めることにした。

(1) 係活動の見直し

- (2) 係活動コーナーの充実と工夫
- (3) 子どもたちが自ら問題を見付け解決していくための指導
- (4) 係活動の情報交換の場の工夫
- (5) キャリア教育の視点をふまえた評価の工夫

4 研究内容

前述した取組に沿って、一つ一つ具体的な取組を進めることにした。

(1) 係活動の見直し

係活動は、学級のめあてに向かってよりよい学級づくりを目指すための活動である。一人一人の子どもがどうすれば自分たちの学級がもっと楽しくなるかを考え、自らの役割を果たす。その活動内容は子どもたちの主体的な活動であり、「やらされている」といった消極的な内容の仕事であってはならない。これまでの子どもたちの係活動のイメージは、お手伝い係や体育係、図書係、学習係などの当番活動と、お楽しみ係のような係活動とが混在しているようであった。そこで、次のように係活動の定義を整理するところから始めた。

係活動とは

- ・自分たちの学級での生活の充実と向上を目指した、子どもたち自身の願いや思いによる自発的な活動
- ・仕事の内容を自由に創り出すことができ、創意工夫を十分に発揮できるが、自分から見付け出さないと仕事がない活動
- ・子どもたちの自主的な計画に任されている活動

であることを、子どもたちと確認した。

次に、学級で話し合った学級のめあてをかなえるために、新たにどんな係をしてみたいか、その具体的な係の内容について話し合った。そうすることで、係活動に対して消極的であったり、やらされていると思っていたりしていた子どもたちの中から、「やってみたいな」「おもしろそうだな」という発言が出てくるようになった。学級のために自分のしてみたい活動を実現していく場としての係活動を認識することで、様々なアイデアを出し合い、子どもたちは友達と協力し合って、係毎に決定することができるようになった。

(2) 係活動コーナーの充実と工夫

ア チャレンジコーナー（情報活用のコーナー）

係活動において、子どもたちが進んで活動するためには、教室環境の充実も重要である。特に、活動の時間が限られているため、すぐに道具や準備物が使えるように「チャレンジコーナー」を設置した。

また、新聞やクイズを作る際に、分からないことや知りたいことをいつでも調べることができるようにパソコンを設置し、インターネットに接続可能な状態にした。必要な情報を集める手だてとして、外部からの情報だけでなく、子どもたちはアンケートをとって、周りの友達がどんなものを期待しているのか、何が必要としているのかなどの情報収集を行った。こうしたアンケートもチャレンジコーナーを活用して作成されていった。



図1 チャレンジコーナー

イ 係のコーナー

係活動の意欲を高め、子ども同士の交流を図るために、係の仕事の紹介やお知らせ、作品（新聞や飾り等）をまとめて掲示する係のコーナーを設置した。これまで係の掲示物は教室の様々な場所に別々に掲示されていた。一つ一つがバラバラにあると注目度が低く、注目されないことが多い。そこで、様々な係の情報を「係のコーナー」としてひとまとめにすることで、そこに行けば係の情報が分かるという意識が子どもたちの中にできた。また、「係のコーナー」を通して他の係が今どのような活動をしているのかを知ることができた。また、係の取組を多くの人に見てもらえるように、ときには、係で作った作品を廊下に掲示したり、展示したりした。その結果、学級内だけでなく同学年や異学年の子どもとも交流が図れるようになった。

(3) 子どもが自分で問題を見付け、解決していくための指導

学年当初の係活動では、係活動と当番活動の違いを十分に理解していなかったため、係活動で何をしたらよいのか分からない子どもが多かった。子どもたちにとって、自らのアイデアをどのように生かしたらよいのか、具体的な活動へ発想を転換していくことは容易なことではない。そこで、「前に担任したクラスではこんな係があったよ」「ある学校でこんな係でおもしろそうな大会を開いていたよ」といったなるべく具体的な実践例や活動内容をヒントとして提案していった。

その結果、次第に子どもたちの中から「それいいなあ」「わたしもやってみたいな」「おもしろそう」といった声が上がってきた。全く何もない状態から考えることも大切だが、ときには、既存のアイデアをもとに「やってみたいな」と思ったことに自分たちのアイデアを追加していく方法をとることは、何をしたいのか具体的な活動へとつながらなかった子どもたちにとって取り組みやすかったと思われる。

しかし、具体的に活動を始めると、思ったよりも時間がかかったり、どうしてよいか分からなくなって停滞してしまったりするケースも出てきた。また、先の見通しの甘さから期限に間に合わなかったり、中途半端な状態で実行したりする活動も出てきた。子どもたちに対してスモールステップで、今何をしなければならぬのかアドバイスを意識し、失敗したことを次に生かす手だてとして考えるように支援した。この頃になると、経験を重ねることで自分たちの力で活動を進めることができるようになってきた。

また、他のクラスや異学年の子どもと交流することで、周りから認めてもらったという思いが、日記や日常の会話からうかがうことができた。

この結果、子どもたちには見通しをもって活動することの大切さ、楽しさが分かった。



図2 ソフトボール大会

(4) 係活動の情報交換の場の工夫

「パワーアップ6の4 ～小学校生活の最高の思い出づくり大作戦～」

子どもたちとは4月当初から、自分たちにしかできないことにチャレンジしていこうと話合ってきた。2学期には、これまでの係活動の見直しを図りながら、様々なアイデアを実現するための活動を続けてきた。子どもたちは、「教室に季節の飾りを作ろう」「ギネス大会を企画しよう」「カウントダウンカレンダーを作ってみよう」などと、意欲を燃やし、それぞれの係で積極的に企画を立てて活動してきた。

しかし、運動会や修学旅行などの行事が続く中、子どもたちのやる気が停滞してくるようになっ

てきた。そこで、11月に活動を見直し、卒業まであと5か月となった頃、自分たちでどんなことができるのかを再度考えることにした。「残り5か月となった小学校生活をより思い出深いものにするために、自分たちでできることを考え、実行していこう！」をテーマに新たな係活動を再編した。

具体的な活動では、以下の5項目を実行した。

ア 議題集め

子どもたち一人一人に「小学校生活の最高の思い出作り大作戦」と題して、どんなことに挑戦してみたいか考えさせた。内容は、自分、学級、学校全体の三つに分類し、学校全体に関しては学校全体に向けて6年生としてできることはないかと助言した。

イ 議題の選定（計画委員会）

計画委員会ではみんなが出した議題を基に何を取り上げるのかを話し合った。意見の中には、「低学年の子どもたちを対象にしたイベントをする」「記録に挑戦する大会を開く」「学校に物を残す」「お世話になった先生に何かをする」などがあつた。この中からいくつするのか、どんなことをするのかなどを話し合うことにした。

ウ 話し合い

事前のアンケートを基に、「イベントをやってみたい」「学校（来年の1年生）の役に立つものを作って残したい」「オリジナル卒業文集を作りたい」「お世話になった先生に手紙を贈りたい」「卒業の飾りを作って卒業式に飾りたい」などの意見が出された。

話し合いの結果、「イベントをする」「卒業文集を作る」「オリジナルアルバムを作る」「来年の1年生用に教室案内板を作る」の四つに取り組むことになった。

エ 係の再編

子どもたちは、これまでからも係の活動の中で、スポーツ大会やギネス大会を企画実行してきた。それぞれの係の新聞づくりやイベントカレンダーづくりを通して、自分たちで、ものづくりをする体験も積み重ねてきた。卒業に向けての思い出づくりの活動についても、これまでの経験を生かし、新しい係で活動することにした。

オ 企画

してみたい活動ごとに分かれてできたグループで、具体的な活動内容を企画した。企画の内容によっては、より細かくグループを分けたところもあった。子どもたちのしてみたい意欲が強かったので、企画はスムーズに進んでいったが、グループの強い希望により、逆に具体性に欠ける企画になってしまっているところもあった。そこで、それぞれのグループ同士で企画案を発表、交流し合うことで、よりよい企画に練り直しをした。

企画の練り直しについては、以下のように発表会を行った。

① 本時のねらい

- ・グループの企画案をクラスみんなに伝わるよう分かりやすく発表することができる。
(人間関係形成能力)
- ・互いの企画案をよく聞き、他のグループの企画案に対して自分の意見や考えをもつことができる。
(情報活用能力)
- ・友達のアドバイスを基に必要な情報を選択、活用し、よりよい企画を立て直すことができる。
(将来設計能力)

② 展開

児童の活動	指導上の留意点	準備物
1 各部ごとに企画案を発表する。 ・ 出版部(卒業文集作成チーム) ・ 製作部(校内案内図作成チーム 看板作成チーム) ・ 写真部(思い出アルバム作成チ ーム) ・ イベント企画部(スポーツ大会チ ーム一年生と遊ぼうチーム)	・ それぞれの企画のよい所や改善 したほうがよい点などに注目して 発表を聞くようにアドバイスする。	発表資料
2 各部の企画説明を聞いて、企画 のよいところ、もう少し聞きたいと ころ工夫したほうがよいところなど の点について、アドバイスカード に記入する。	・ よりよい企画になるためにどのよ うにしたらいいのか、自分なりの考 えを持ち、アドバイスできるようにさ せる。	アドバイスカ ード
3 友達のアドバイスカードを参考 にして、もう一度企画を練り直す。 4 先生の話聞く。	・ アドバイスカードを生かして考え 直すことができるようにさせる。 ・ 今後、卒業までの間にどのよう にして計画を進めるか、具体的に 考えるように話す。	

③ 「パワーアップ6の4」の取組を終えて

係活動の発表会では、アドバイスカードの中に企画内容についてのアドバイスが多く出された。これまでの子どもたちの活動では、自分の活動に一生懸命になって、周りの友達がどんな活動をしているのかあまり意識して活動してこなかった。今回の発表会では、それぞれの企画を聞き合う場を設定したことで、まず、他の係が今どんな企画を進めようとしているのかを知ることができた。そして、自分の感じたことや思ったことを伝えて交流することができた。こういった場の設定によりキャリア教育の基盤となる人間関係形成能力を高めることができ、お互いの情報を共有することで、情報活用能力が高まった。更に、学級集団の一員としてそれぞれの企画がよりよいものになるように考え、卒業に向けての各係の企画が「このクラスでよかったと思える学級づくり」へと発展していった。

個々のアドバイスカードの中には、「一年生にも分かりやすいようにふりがなをふった方がいい」、「案内板を一年生の目の高さに合わせたらよい」などの一年生を意識した具体的な意見もあり、こうした、アドバイスをうまく取り入れて3学期の具体的な活動につながるような話し合いができた。

(5) 評価の工夫

様々な活動を進めていると、発想は豊かで「あれもしたい」「これもしたい」との意欲はたくさんあっても、長期的な視点で展望をもって計画していくことが苦手な子どももいる。こうした場合に

は、教員の側から指導をしたり、熱心に活動を続けているグループを褒めたりすることで刺激を与えた。

また、係で企画した大会の後には子どもたち同士で個々の感想を出し合ったり、紙に書いて係の子どもにフィードバックしたりした。そうすることで、子どもたち自身が自分たちの行ったことが、周りの人にどのように思われているかを知ることができた。また、係以外の子どもたちも、張り出した個人の感想を熱心に読む姿が多く見られた。

また、この取組においては、キャリア教育の視点で子どもたちに身に付けさせたい能力目標を設定し、評価を行った。

下記に示しているとおり、係活動を四つの視点で評価規準を作成して評価した。付けたい力を明確化することで、子どもたちに対して意図した支援をすることができた。例えば、人間関係形成能力の観点では、友達と話し合いながら進めることはできたが、一部の子どもに役割が偏っていることが多かった。そこで、しなければいけないことを考え、それをだれが分担するのかきちんと話し合う過程をつくることで、スムーズに活動が進むようになった。

また、情報活用能力の観点では、アンケートをうまく活用して、クラスや他のクラスの友達がどんな願いや思いをもっているのかを捉えて活動することができるようになった。

意志決定能力については、見通しをもって活動することがなかなかできなかったが、同じような活動を繰り返し続けていくうちに、次は何をしたらよいのか、どんなことを準備しておかなくてはならないのかなど、少しずつではあるが予測を立てて活動できるようになってきた。

キャリア教育で必要とされる四つの能力の観点から子どもたちのそのときの状況の評価し、達成できていない場合には、タイミングをみ的確にアドバイスをしていくことで子どもたちの意欲が持続し、活動も高まりを見せた。

表1 係活動の評価規準

	人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意志決定能力
低学年	・友達と協力して活動を進めている。	・自分の仕事を見付け、友達の意見を聞いて活動をしている。	・自分の仕事の仕方や活動する時間や場所などを理解している。	・やってみたい活動内容を自分たちで決め、よりよく活動する方法などについて考え、判断している。
中学年	・係の中で分担を決め、友達と協力しながら工夫して活動している。	・学級に必要な係を作るための話合や準備をしている。	・計画の立て方や活動の分担の仕方、活動の具体的な内容を理解している。	・当番と係の違いを踏まえながら、学級をよりよくしていくために必要な係を作り、見通しをもった計画を考え、判断している。
高学年	・係の活動計画や役割分担をし、組織的な活動をしている。	・クラスのみんなの意見を基に学級生活の向上につながる活動をしている。	・係の具体的な活動計画の立て方、学級のみんなの思いや願いを生かす方法を理解している。	・学級生活の向上につながる活動を見付け、見通しをもった計画を考え、判断している。

5 研究結果と考察

これまで、「子どもたちの自主性に任せて自由に活動させる」「子どもたちが生き生きと活動していたらよい」といった視点で係活動をとらえてきたのだが、係活動の意義や価値はもっと大きいのではないかと考え、係活動に焦点を当てようと考えたのが今回の研究動機であった。

係活動の意義を考えたときに、係活動で培った力は、社会の一員として必要とされる力と共通しているのではないかと考えた。つまり、係活動で学級という集団の中で、自分の役割を理解し、果たしていこうとする態度は、職業に就いて自分の役割を果たそうとする態度へとつながっていくのではないだろうか。将来へつながる係活動の展開とは、子どもの勤労観、職業観を育てる教育、つまり、キャリア教育を実践していくことになる。

本研究では、係活動の指導の中にキャリア教育で求められる四つの視点を指導者である教員がしっかりと捉えることで、子どもたちの能力が高まり、活動を活性化させることができるのではないかと仮説に基づき研究を行った。

その結果、次の4点のことが指導を通して、結果として得られたと考える。

- ① 「係活動のねらいにキャリア教育の能力目標を取り入れることで、子どもたちへの指導の在り方が明確になった。」

特別活動は、子どもたちの自主的・主体的な活動が基本である。しかし、その一方でねらいや目標が明確にならず、児童がしてみたいことをするだけ活動になってしまっていた。今回、キャリア教育の視点で係活動のねらいを見直したことで、児童に身に付けさせたい能力が明確化し、指導に生かすことができた。その結果、クラスの人間関係が豊かになり、互いに信頼し合える雰囲気が増えてきた。また、初めの頃は教員の指示を待って活動することが多かったが、次第に子どもたち自身がやってみたいことに挑戦しようとする態度が見られるようになってきた。これは、キャリア教育で求められる能力を獲得していくことで少しずつ子どもたちが自信をもち、前向きに活動できた結果ではないかと考える。

- ② 「係活動は、キャリア教育の基盤ともいえる人間関係育成能力を高める優れた手段となることがわかった。」

キャリア教育の基盤となる力は「人間関係形成能力」である。目的を共有し、協力し合って活動することで、子どもたちは互いの意見を述べ合い、学級をよりよいものにするためにがんばる姿が見られた。特に卒業に向けての「パワーアップ6の4」での取組は、卒業まであとわずかな時期にクラスを一つにまとめ、人間関係を深めるよい機会となった。

- ③ 「キャリア教育の将来設計能力が係活動を通して身に付いた。」

キャリア教育では、自分の考えた目的を達成するために試行錯誤を繰り返しながら、よりよい方法を見付け、見通しをもって活動する力が求められてくる。

本研究において、子どもたちが係活動を通してどんな工夫をすれば学級が楽しくなるかを考えた。そのために役割分担を考え、目的に向かって取組を進めることで、見通しをもって活動する力が実践を通して身に付いた。こうした活動は他の教科等の学習でも展開されているが、係活動を中心に取り組むことで、自分たちの生活を見直し、実生活の中で体験を通して得られた意義は大きいと感じている。

- ④ 「キャリアの評価を子どもたちへの指導に生かすことができた。」

係活動のねらいをキャリア教育の視点で見直し、更に評価規準を作成し、客観的に評価したこ

とで子どもたちに身に付けさせたい力がより明確になった。その結果、一人一人の子どもに対する評価がはっきりとし、その後の適切な支援や助言につなげることができた。

以上、四点において成果を得ることができた。しかし、係活動の時間の確保の難しさや、すべての子どもに力を付けるための更なる工夫の必要性などの課題も残った。

6 おわりに

係活動は、やらなくてもだれも困らない、でも、やってみると面白い。だからこそ、子ども自身のやってみたいという意欲が係活動の原動力となる。こうした自主的な活動こそが、子どもたちの将来にとって最も大切にされるべき力である。将来、激しい社会の変化の中で様々な課題が子どもたちを待ち受けている。そうした社会の中でいかに自己を生かして人生を歩んでいけばよいかを考えたときに、キャリア教育が目指している将来設計能力・人間関係形成能力が、将来大切な基盤となるであろう。

また、子ども自身が学級の中で役に立っているという有用感や自己効力感は、将来、社会に貢献しようという思いにつながっていくものと考ええる。

参考文献

- (1) 三村隆男・児島邦宏 「小学校・キャリア教育のカリキュラムと展開例」 明治図書 2006
- (2) 三村隆男 「はじめる小学校キャリア教育」 実業之日本社 2004
- (3) 宮川八岐 「小学校特別活動基礎・基本と学習指導の実際」 東洋館出版社 2002
- (4) 進路指導 “キャリア教育について” 4月号 日本指導協会 2006
- (5) 特別活動研究 2005 9月号 明治図書 2005
- (6) 特別活動研究 2006 6月号 明治図書 2006